

真和

2022
令和四年

7
月号



「一輪の花でガンを治そう」
を掲げていた頃のカーネーション

年間テーマ

巔精髓想全

感性能力を磨き癒の探究が
単位存在の本質を求めることにつながる

- 原点に立ち返る
1輪の花でガンを治そう
- 若返りと延命の実践
- 生態系生体システム
プログラム農法の全体像
- はじめの一步
- お知らせ・勉強会案内・編集後記

一枚の写真が救ってくれた

まったく頭が働かずにスランプに陥っていた私に持ちなおす力を与えてくれたのは、一輪のカーネーションでした。締め切り5日前になっても原稿は一向にまとまらず。締切をパスしたらどうなるだろう・・・などと思っていた時に、「一輪の花でガンを治そう」のカーネーションの写真が届きました。ひと目見た瞬間に劣性になっていた私の意識が持ちなおし始めたのを感じました。「原点復帰」で真和に掲載したいと思い、昔の写真を探してもらっていました。こんな形で私の心が持ちなおすとは思いませんでした。

生体エネルギー産業の原点

このカーネーションは佐藤政二先生と千代子理事長の産業の原点です。そして「一輪の花でガンを治そう」はこの会が全国に広がるきっかけになった言葉。カーネーションのダンボールにはこの言葉が印刷され、大田市場で一番の評価を得ていた話は会員であれば一度は聞いたことがあるでしょう。

「ガン」という言葉も、劣性遺伝子支配をわかりやすく表現した言葉にすぎません。佐藤先生は「一輪の花でガンを治そう」の次元を真剣に目指してきました。そのため必要なことは何かを60年以上に渡って問い続けて今の技術と学問があります。

今までも、食べて健康を謳ったり、一本のトマトに何千個という実をつけたり、巨大なかぼちゃをつくったり、様々な農業技術や体系を説いてきた人はたくさんいます。しかし30年以上前に「一輪の花でガンを治そう」という視点を持ちえた人がいたのでしょうか？「人類宇宙自然に求められる物語」をわかりやすい形でカーネーションにつけた視点は今でも通用します。表に出る時には薬機法などの法律も考慮する必要がありますが、自分たち

重要な点(ツボ)を見極める

自然界を解析していく時、現象を細かく因数分解していきます。その時に「ここを変えれば全部が変わる」大元にあるものを見極めていきます。

- ・例えば、肉体の生体システムであれば、60-70%を占める水
- ・構造体を司るタンパク質
- ・エネルギー源となるATP

この3つが挙げられます。そしてこの3つのさらに前提にあるのが「生体エネルギー」です。

ではこの生体エネルギーを高めるにはどうしたらいいか？佐藤先生は考えました。その結果できたのが、生体エネルギー応用商品です。農業用資材、きわみ、さこい、しらべなど。そしてこれらを更に深めて、進化させていくために論理学が必要となり、その前提をどこまでも遡っていった結果、あなはん、あとち、あでじりといった新しい言葉と文字ができていきました。佐藤先生の今の学問も、決して難しいわけではなく、現象を変えていくためにどこまでも前提を遡っていった結果に過ぎません。視点はシンプルなのですから、考え方の基本さえわかれば感覚的にとらえられるようになっています。

難しいのは学問ではなく、その視点を授かる準拠位置を持てるかどうかです。これは、佐藤先生の学問と技術を応用して発展させていくためには必須になります。そして私たち会員は、じうしみの道を歩み、これからさらに発展させていくために、それぞれが自分の産業でこれをしていかななくてはなりません。

まずは真似て実践してみます。そこから型を自分のものとして新たな次元へと進化させていく学びを会員のみならずと共にしたいと思っています。

次ページでは、原点復帰で約30年前の会の案内書を掲載します。



原点に立ち返る

一輪の花でガンを治そう

写真：「一輪の花でガンを治そう」の頃のカーネーション

産業で人類のあらゆるガンを治す

- 「一杯の水でガンを治そう」
- 「一杯のご飯でガンを治そう」
- 「一個のレタスでガンを治そう」
- 「一部の冊子でガンを治そう」
- 「一戸の住宅でガンを治そう」
- 「一本の差し歯でガンを治そう」……

この次元を真剣に目指す産業人100人が集う構想を佐藤先生は持ち続けています。それも「じうしみの社会」の実現を真剣に突き進んでいるからなのです。

「じうしみの」とは、人類・宇宙・自然、まさにここから求められること。さらに、未知で未来の優性遺伝子支配、超優性遺伝子支配からも求められること。100年後、1000年後の未来から求められること。

あなたの存在が人類だけでなく、宇宙自然からも必要とされ求められる姿を想像できますか？そうしてあなたの存在だけでなく、あなたのつくったものが、例えば法隆寺のように1000年後の未来からも求められ続ける姿を想像してみてください。それだけのスケールで時間を超越して人智を超えて人類宇宙自然に貢献できる存在になることが当会創設者の佐藤政二先生の目標であり、私たち会員の目標です。「じうしみの」を単なるキャッチフレーズに終わらせないために、私たちは自分の能力に自分で制限を設けることなく、原点復帰していく必要があります。

鎮鎮識を体現したカーネーション

「一輪の花でガンを治そう」のカーネーションは、普通に飾っておけば3ヶ月近くも咲き続けてくれました。しかし、この花を病院にお見舞いにもっていくと、数日で枯れてしまったそうです。

必要な場には自らの命(生体エネルギー)を与える精神性をもったカーネーションでした。すべてのモノに意識があるとするのはもちろん、花自身が置かれた環境を知り、するべきことを知り、GIVEの精神で行動に移す。生態系生体システムプログラム農法(以下、プログラム農法)は、この次元を体現できる農法なのです。

今でも勉強会に病気の人や体調の悪い人がたくさんいると、佐藤先生の疲労度は増大するそうです。それは先生だけでなく、会員でも生体エネルギー準拠位置が高まってくると勉強会で必要な人にエネルギーを与える位置になる人も多くいます。こうしたことがあっても「エネルギーを奪われた」と思つことなく「必要な人にGIVEすることが当たり前」と思える精神性をもてるようになっていきます。GIVE&GIVE&GIVEが当たり前の「鎮鎮識」の精神性が私たちの目指すところでもあります。そして佐藤先生のカーネーションは「鎮鎮識」の体現だとわかります。

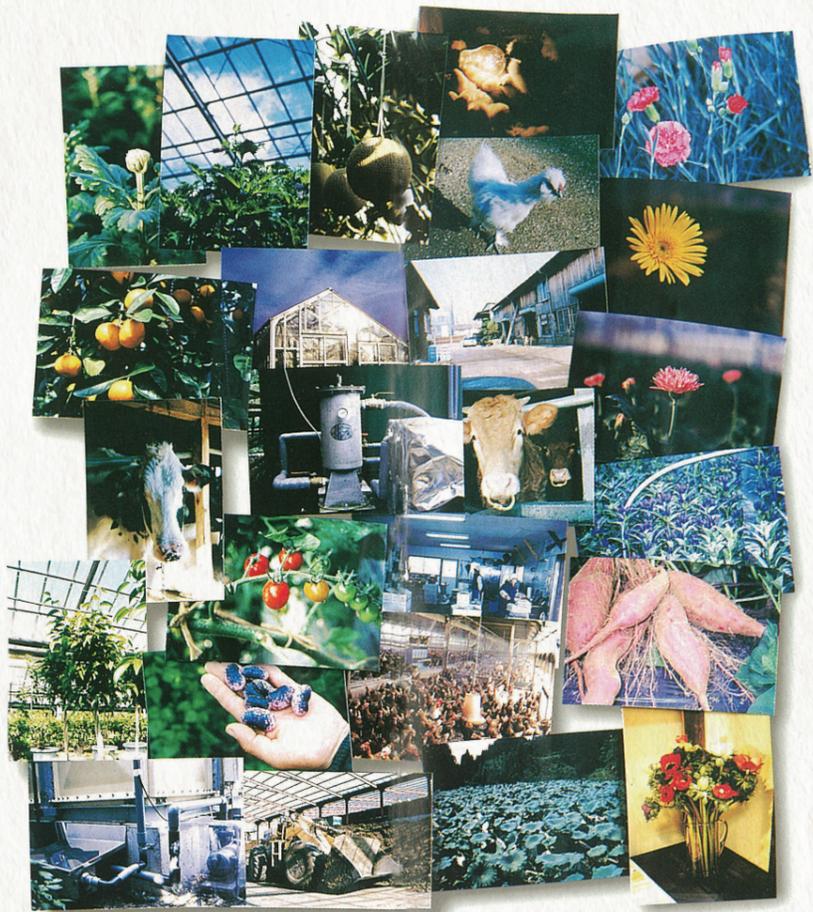
生体システム実践研究会への招待。

【生体システム実践研究会目的】
我々宇宙人は、宇宙論的証明の中で生体遺伝子支配を自然の中で学び、存在の意義を正し、魂を磨き、動物、鉱物、分子、原子の生体システムの神髄を追求し、真正なる社会に貢献するものである。

人類は、

本来的には地球自然に対して善人でなければなりません。しかし、現実にはどうでしょう。全く逆の立場にいるようです。気持ちだけは善意を抱いていたとしても、その実、何一つ有効な手だてをとる事が出来ずに、結局は自然の破壊を重ねるだけになってしまっています。こうして自分の気持ちと現実との矛盾を抱え、いつのまにかあきらめが先に立つようになって

てしまっているのでしょうか。何とか現状を打破する実践的な手段はないものか？ 私たち生体システム実践研究会はその現実的な手段を実践をもって示そうとしています。連作障害を直す技術もそうです。これは砂漠を緑化することに通じています。水を蘇生化する技術もそうです。これは全ての存在を蘇生化することにつながります。そして全てのものは情報で出来ているという考え方もそうです。これは自然の階律（戒律）と生態系のバランスを理解することにつながります。他にも元素の特性からヒントを得た支配系というとりえ方もあります。 私たちのとりえ方、取り組み方が、今の学問の体系には馴染みのないことは承知のうえです。しかし、現状を一つの結果としてとらえらるとすれば、なにも今の



全国の会員が様々な分野で生体エネルギーの応用に取り組んでいる

学問に固執する必要性は全くないと言ってもよいと思っています。かと言って今の学問の全てを否定するというものではありません。

私たちが

地球自然に対して善人であるためには、生態系の維持に努めなければなりません。そのためには、個々の生体システムの神髄を説き明かさなければなりません。それが、そこで必要とされる考え方が生体エネルギー（仮称）という視点です。今までの物の見方は、全て形を基本にした熱エネルギーの原点だけでしたが、自然の動きを説明する際、その考えただけではあまりにも不十分過ぎます。そこで私たちは内容を基本とした生成過程に必要なエネルギーを生体エネルギーと名付け、その理論体系を独自に構築し、全ての実践活動の中心理論として位置付けています。生体エネルギーとは、物が生まれた時点から関与してくる、いわば万物の基礎的エネルギーと言うことが出来ます。 さて、その生体エネルギー理論ですが、その内容を理解するためには想像量子宇宙論の裏付けが必要となってきます。これも私たちが、広辞苑に謳われている宇

が機能的に結び付いてきます。 私たちは、情報に関わる因子、機能、エネルギー等々、より細かい段階までプログラムに沿って研究を進めていきます。そこでの原書が自然であることはもちろんのことです。今知り得ているだけでも、自然には厳しい戒律があります。全て情報から作られているとする万物は、その情報の単位(力・量・内容)が示す階律の中で存在の在り方が決定されます。その戒律(階律)の中、人類が本来の役割を果たすためには、準位を高めて自然を克服し、自然を超えることにより自然から求められるようにならなければなりません。この時点に至って、人類は宇宙自然を踏まえた上で、地球自然に対して善人たりうることが出来るのです。

これは壮大な物語です。しかし、身近な実践からしか始まることの出来ない物語でもあります。私たちが生体システム実践研究会の目指すものは、存在の全てに関わり、機能の全ての既成概念を超えて想造し、実践の中で否定肯定を繰り返しながら自然の真理を求めていくことです。

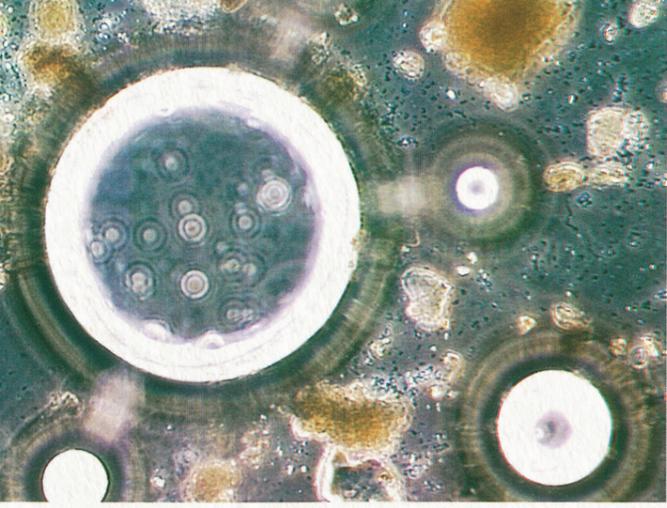
そして一人一人が今を生きる実践の中にそれぞれの人生物語を展開することであり、同じ目的に向かって固有の物語を完成させることです。 宇宙の物語、地球の物語、人類の物語、そして私の物語。自然に対して善人であることを基本に一人ひとりが固有の物語をもつことで社会が大きく活性化されると信じております。

● 自然の戒律(階律)を素直に認め、自然の存在をわが心と思い、全ての美の根源を自然に映し出し、潤いのある心の戒律(階律)のもとで自らを高め続けていきたい。

宇宙論的証明を基本に独自に作り上げた宇宙論ですが、全て実践が裏付けになっていることだけは一言申し添えておきます。そこで想像量子宇宙論、その骨子だけでもご紹介しましょう。 一般に物を構成している最小単位を量子と言います。今の物理学では素粒子あるいは素子(？)が量子として位置付けられているわけですが、私たちの説では「想像」が量子と位置付けられています。まず、無始より起こりが起こりを起こして事の起原を作った、というところから始まりません。その事が始まりを誕生させ、初生の量子である想像を作ります。想像は次々とソウゾウたち(創造、想像、創像...)をつくり続け、バランスの基礎である無をつくり、情報の基礎である心(意識、思考、感覚、感情、感能、感性...)をつくり、事柄の全てに関わる無形なるものを作り続けていくととらえています。そこからさまざまな過程を経て、形あるものへの道標とも言うべき無限の情報準位をもつエネルギー体(空)が誕生し、成



エネルギー準位の高い場において、5年を経過した今なお腐食せずにいるベッド側板



結有化現象をイメージさせる顕微鏡写真(×1500)

長し続ける空はある条件の下で初生の遺伝子として誕生することになります。このとき形が誕生し、形あるものは必ずプラス・バランスを崩す事になり、そこから動きが生じ、時間、そしてその内容から次元が生まれます。このリズムは生まれるの継続をもって続き、その時、情報を引き出し、情報を運ぶ情報共鳴因子と

しての光、音、香り、意識、X...:などが同時に生まれます。 私たちは初生の遺伝子として誕生したものを基子と名付けました。基子はバランスを取るために内より外に向かい常にプラス1高い放射エネルギーを出し続けることとなります。以後、物体変化は結有化、結離化が基本となり、遺伝子は集合することによって、さまざまな段階を経過していきます。その過程が素子、素粒子、元素...:であると想像します。 今存在している次元ある宇宙、時間ある宇宙は、基本的には上記の営みのある相似過程の中で形作られたというのが想像量子宇宙論の大まかな骨子ですが、詳しくは勉強会の中で習得していく以外ないとして承ください。

こうした物の生まれてくる流れ、リズムの中にあつて生体エネルギーの性格はより一層明瞭性をおびてきます。さらには、場の理論、支配系の理論、放射エネルギーの理論、集合遺伝子の理論へと実践に適用していくにあつて必要な理論



二輪の花でガンをなおそうと謳われるカーネーション



生体システム実践研究会代表・佐藤政二(左)、同幹事長・佐藤千代子夫人(右)



若返りと延命

盈輪園の実践

●産業としての農業

産業とは、経済を豊かにすること。経済とは国を豊かにする前提。国を豊かにするには、人民の能力を向上させること。人民の能力を向上させるには、どんな困難なことでも解決できる智慧と具体的手段を持つ事。人間としての種の能力がベスト（優性遺伝子支配）になった時に貢献度が向上する。私たちは、そういう人間を誘導することができる作物をつくることを大前提に、「エンゲル係数が高いことを善しとする文化」を定着させることを目標に取り組んでいる。

●実践の概要

先人たちが取り組んできた人類の永遠のテーマ「若返りと延命」。そのキーワードとなる「リン脂質（レシチン）」の増量と能力を増幅することの重要性について、佐藤政二先生が30年以上前から提唱し実践してきたことを、ホウレン草の栽培を通して植物や土壌の反応、化学分析などを基に実証する。

* ATPやリン脂質の構成成分の要素であるリンを「長野県施肥基準の約10倍量施用」。

〈目的〉植物にリン脂質を多量に合成させる
〈栽培作物〉ホウレン草
〈栽培期間〉2021年12月10日～2022年2月28日（75日間）
〈栽培条件の整備〉生態系生体システムプログラム農法に基づく土づくりに加え、機能化したリン酸質肥料（過リン酸石灰）を土壌に混合。

* 機能化の方法 真和X2：過リン酸石灰1の比率で混合し、そこに岩森力を1セットに加え21日以上養生する
* 過リン酸石灰の使用量は長野県施肥基準 12kg/10a当たり成分量の約10倍118kg

●実践結果

〈生育過程〉
発芽は実践区の方が遅く、またその後の生育についても実践区の方が緩やかに推移。生育後期に追いつき、ほぼ同時期に収穫。実践区、対照区共に例年同時期と比較して、1週間～10日間ほど早く収穫。
葉の厚み、光沢、葉脈がはっきり出ているなど随所に明確な違いが見られた。実践区の方が全体的に引き締まりポリウム感のあるものになった。

〈食味〉
実践区の方は、生湯掻きごちらの場合も甘みが強い（葉身の方が株元よりも違いが大きい）。一方、対照区の方は雑味があり後味が悪い。

〈湯掻いた際の状況〉
対照区の茹で汁の色の方が色が濃い。実践区よりも養分の溶出が多いと考えられる。

〈栄養成分分析〉
野菜からは検出されない場合が多いリン脂質（レシチン）が105mg/100g検出された
体内で重要な働きをするリンの含有量が多い

・葉緑素の構成成分であるマグネシウムの含有量が多い
・たんばく質の立体構造を形成する際に関与するアミノ酸「プロリン」が多い
・マンガンが桁違いに多い

●考察

機能化したリン酸質肥料を土壌に多量に施肥することで、植物自らが必要な因子を取り入れながら生育していることを示唆する反応や現象が随所に見られた。その一方で、予想とは違う結果も見られた↓実践区の方がホウレン草の個性が明確になると思っていたがそうではなかった。（成分的には鉄の含有量が一般指標の1/2）
・マグネシウムの含有量が増加↓クロロフィルの構成要素
* 光を翻訳する能力が変化する↓ATPの能力に大きな影響を与える準拠位置エネルギー（仕事エネルギー）が向上することが考えられる。

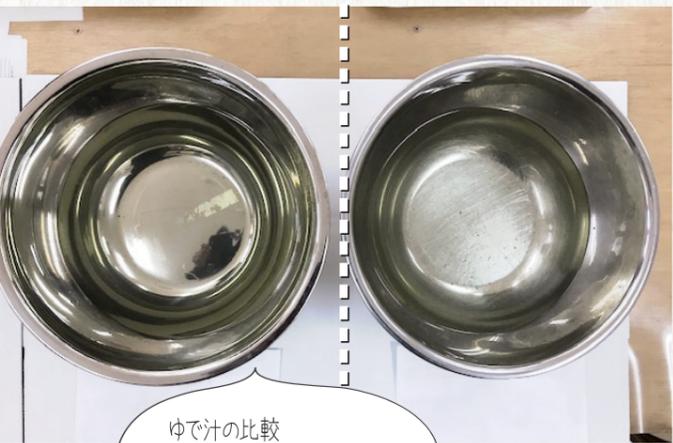
●課題

・たんばく質の能力を向上させる
↓シスルフィド結合を誘導する手法を明確にする
↓有機物の投入量の増量（耕土量の10%以上）
・作物体の万有引力値を向上させ鉄の代謝系を活性化させる

* 機能化したミネラルの場合とそうでない場合のミネラルの要求量が異なることも考えられる。
* 吸収させる上で他に足りない因子、特にエネルギーなどが不足していたことも考えられる。

・リンや鉄など必須ミネラルについて、要求量（絶対量）を満たしていなかったことが考えられる。
* 機能化したミネラルの場合とそうでない場合のミネラルの要求量が異なることも考えられる。
* 吸収させる上で他に足りない因子、特にエネルギーなどが不足していたことも考えられる。

・ATPの能力差の証明
※ATPとは、すべての植物、動物および微生物の細胞内に存在するエネルギー分子です。ATPは、細胞の増殖、筋肉の収縮、植物の光合成、菌類の呼吸および酵母菌の発酵などの代謝過程にエネルギーを供給するためにすべての生物が使用する化合物です。
ATPの源は、太陽の光エネルギーです。植物の光合成によって、光エネルギーは葉緑体でATPに変換され、そのエネルギーを使って有機物が合成されます。植物は呼吸も行います。植物細胞にあるミトコンドリアで、光合成で合成した有機物を材料として呼吸を行い、ATPを合成します。



ゆで汁の比較
対照区のほうが、緑色になって色素が出てしまっています。

プログラム農法の

全体像

食の物語と生体エネルギーをいただく

単なる栄養源に留まらず、込められた物語と命（生体エネルギー）を私たちは頂いています。そこには植物の特性や生産者の想いだけでなく、土地の持つ履歴や地域の情報、土や水の情報、流通過程で経験すること、消費者のじんちの物語、料理の作り手の想いと物語、食べる人の準拠位置や精神性、すべてが一つになって「食」の物語になっています。

3月号でもご紹介した瓜生さんの豚肉。これを茹でた時のアクがいつもより少なくなったことがありました。その理由を尋ねると「トラックに鼓動が口つただけ」だそうです。通常、流通過程で鮮度が落ちるとは考えても、能力を加算できるとは考えないでしょう。この事例は、流通過程でも物語を加算して能力を高めることができる、プログラム農法のとてどもわかりやすい事例です。

流通や消費まで一貫してプログラムする

通常の農法には流通や消費者との関係性は含まれないことが多いのですが、プログラム農法には流通や消費者からのフィードバックまでを含めた循環がシステムに組み込まれています。なぜならば、生産と流通は切っても切れない関係にありますし、生産と消費も同じく相対関係にあります。相対を取り込んでひとつのシステムに落とし込む手法は、物事の本質を読み解き、仕組みを見出す考え方としても

プログラム農法について

「プログラム農法」では、まず、育てたい作物を定め、その作物を栽培するのにかかわしい「圃場」を作り上げることから始めます。これが土づくり（土壌づくり）です。

土づくり本来の目的は養分の供給力を高めたり、根の活力を高めて養分の吸収力を向上させたり、急減な環境変化に対する抵抗力を持たせることなのですが、土壌の能力が大幅に低下している現在は、それができているケースはごくまれとなっています。

これは健全な圃場では実現できていたことが、土壌の能力低下によりできなくなってきたのだと考えられます。

「プログラム農法」には他の農法にはない「生体エネルギーを高める」という手段があります。生体エネルギーは、存在の生命力そのもの。土壌や水、農作物、そして人といったあらゆる単位の生体エネルギー準拠位置を高める手段をもつのが、生体エネルギー応用商品です。プログラム農法の成果としてわかりやすい例をあげると。

- ・同じ作物を何年も栽培しているとおこる連作障害を克服できる
- ・作物の日持ちが大幅に良くなる
- ・抗酸化力の向上
- ・有効成分の数値が数十倍にも増加
- ・一般的には下がらないとされている土壌のリン酸吸収係数を下げることができ
- ・PHが酸性に偏っていても問題なく栽培できる
- ・数年分の肥料や堆肥を一回の施肥で投入しても問題

有効です。生体エネルギー理論を含む、生体エネルギー哲学的加学もこうした視点から生み出され続けています。

じんちの重要性

佐藤先生はことあるたびに「じんち（自宅）の重要性」を説きます。それも、じうしみの道を歩むために必要なことだからです。

農作物や事業、生産されるすべてのもの（こと）は、それをつくる想造主（みなさん）の想造体、想造態です。想造体の準拠位置は、想造主の準拠位置に依存します。じうしみの次元の生産物をつくり、事業が栄えていかないことには、じうしみの産業を大きくすることはできません。そのために事業の想造主となる人の「じんち」の能力は必須です。

以前にも真和でご紹介したこともありますが、佐藤先生のじんちの能力をさとりピクマ磁場アースシステムで高めると、すでに会員宅に設置されている「きわみ」の能力まで高まりました。このことは、きわみの想造主である佐藤先生の能力がじんちで高まることによって、すでに製造されて設置されたきわみの能力まで高まるということです。

このことを農業に当てはめると、生産者のじんち（自宅）の能力を加算することで、その人がつくったものを食べた人の能力まで事後的に高めることができるということになります。この生産者の生産量が多ければ多いほど、食べた人も多くなり、多くの人の助けになっていきます。問題は、このことが思考的な理解に留まらず、腹に落ち、精髓に収まっているかどうか。どこまでも高め続ける理由は、自分だけのためではないのです。じうしみのとその先の人類宇宙自然のために高め続ける必要があります。こうしたことから、食の能力を高めるプログラム農法には、自宅の能力を高める「じんち説」も含まれていると考えたほうがいいでしょう。

題が起きない

・天候不順など、不測の事態においてもほぼ例年通りの収穫が得られる

この中には、圃場や作物の能力が単純に高まった事例もありますが、人の都合で圃場に負担をかけている事例もあります。能力が高まった結果であることに変わりはありませんが、本来であれば、圃場環境のバランスがすべて整った状態が一番望ましく、圃場に無理をさせるほど生体エネルギーは余分に使われるのだということをまずは理解する必要があります。

プログラム農法の目的と土づくりの要点

次ページの表は、農業者の方々には見慣れた表だと思えますが、プログラム農法の目的と土づくりの要点を一覧にしたものです。プログラム農法ではこれだけの項目を現場を見ながら診断して処方していくと言います。

これは農業に必要な条件ではありませんが、他の産業でもこうした表がつけられるはずなのです。

例えば、建築における必要条件をプログラム化することもできます。教育の現場ではどうなるでしょう？工場の環境では？勉強会ひとつとっても詳細にプログラムすることで、今までにない場を想造することができ。会員がこの会で学んだ先に、率先してこれからの時代に必須とされるプログラム産業を自分たちの力で想造していくために、今回この表をご紹介します。

生態系生体システムプログラム農法の物語

プログラム農法は、生産→加工→流通→消費等すべての過程において、生体エネルギー加学技術を活用し、社会から必要とされる能力を向上させる食品を実現する農法です。



生態系生体システムプログラム農法の目的と土作りの要点

エネルギー性	生体エネルギー準拠位置(霊命)	土壌粒子、構造粒子の能力と強度が、エネルギー勾配を以って教育準拠位置を現わし、磁区性を高める。				
	土壌エネルギー(力・量・位)	目的とする栽培条件を満たす存在の相対バランスと、空(営)の仕事エネルギー、位置エネルギーの総合準位を高める。				
	合一力(希求系)	超然級土壌とするため、正気的原動力を土壌粒子に作り、目的とする作物の機能(自然治癒機能・自己調整機能・免疫機能・活性化機能)を優性遺伝子支配に導くことのできる団粒構造を作る。				
		好ましい状態(目安)	悪化状態(目安)	改善の目安	生体エネルギー処方	
物理性	三相分布	固相	40%	固相が50%以上は堅すぎる 30%以下は柔らかすぎる	粒子直径0.05mm~1.0mmとする	水の仕事準位を使うことで遺伝因子・意識因子・想造因子を高め土壌機能を自動制御する
		気相	30%			
		液相	30%			
	腐植含量	予備腐植	10%以下	多すぎる		
		栄養腐植	10%以上	少なくなる	長期的安定を保つために真正腐植化を促す	有機物の準位を高める
		真正腐植	10%以上	少なくなる		
	土性・構造・機能の準拠位置		緩衝能が高い	緩衝能が低い	物質の生体エネルギーを高める	土壌環境を整え緩衝能を高める
	粒子		0.05mm~1.0mm	0.01mm以下 1.0mm以上	聚合度改善	媒体エネルギー
	水機能(溶存酸素)		DO 10ppm以上	DO 10ppm以下	水捌け改善 酸素+良質有機物	深層良質堆肥処理
	素子の能力		機能が高い	機能劣化	物質プログラム 粒子準位を高める	詐子能力 自然から求められること
化学性	PH	H ₂ O	6.0~7.0	低くなると酸性化 高くなるとアルカリ化	塩基飽和度のバランスをとる	緩衝能を高める
		KCl	5.0~6.0			
	CEC	砂土(S)	~12.5			
		砂壤土(SL)	12.5~25.0	腐植が減少する	腐植を増やす CECを20me以上にする	無機物、有機物の準位を高め、複合体をベスト結合させる
		壤土(L)	25.0~37.5			
	AEC	電気の二重層の内外溶液のバランス		バランスが崩れる	目的に合わせた施肥設計と真正腐植を増やし内外溶液のバランスをとる	含水酸化物の準拠位置を高める 透水性を高める
	燐酸吸収係数	1000以下		高くなる	燐酸固定を除く	エネルギーを高める
	EC	0.3~0.8mS/cm		0.3以下は肥料不足	栽培目的により塩基飽和度のバランスをとる	肥料設定に十分な土壌準位にする
	酸化還元電位(Eh)	水田 200mV~300mV 畑 600mV~700mV		低くなる	酸素+良質有機物	機能体酸素の供給
	pF	1.8~2.2		毛管水の移動が困難になる	粒子準位を高める	深層良質堆肥処理
	C/N	8~15		バランスが崩れる	良質堆肥の投入	必要とする有機物量に合わせた生体エネルギー量
	CaO	塩基飽和度 50%				
	MgO	塩基飽和度 20%		塩基飽和度のバランスが崩れる	塩基飽和度のバランスをとる	
	K ₂ O	塩基飽和度 10%				
	有効燐酸	P: 10~30mg/100g				
アンモニア態窒素	NH ₄ N: 5~35mg/100g					
硝酸態窒素	NO ₃ N: 5~15mg/100g		適正量の過不足	プログラムに準じる適正量と炭素のバランス	栽培に合わせた肥料値とそれを上まわる生体エネルギー量	
全窒素	N: 0.01~0.05%					
硫黄	窒素の50%~100%					
微量元素	鉄・亜鉛・マンガン・銅・モリブデン		バランスが保たれている	バランスが崩れる	目的量のバランス	生体エネルギー準位を高める
微生物性	総菌数	10 ⁸ /g以上		10 ⁸ /g以下		
	細菌	10 ⁸ /g以上 B/F値 1000倍単位		10 ⁸ /g以下		
	放線菌	10 ⁷ /g以上 A/F値 100倍単位		10 ⁷ /g以下	有効菌を入れる 良質堆肥を入れる エネルギー準位を上げる	生体エネルギー準位を上げる 良質堆肥の投入 機能体酸素の投入
	糸状菌	10 ⁵ /g以上		10 ⁵ /g以下		
	フザリウム	10 ³ /g以下		10 ³ /g以上		

自然哲学的加学範疇に於いて、法幾化次元推論式論をもって繫界命準位実体化術をする。

生体エネルギー準拠位置という視点

土壌に必要な要素は不足すると作物に様々な障害が出してしまうので、本来全ての要素は不足なく、できれば様々な事態に対応できるように、少し多めに圃場にあるべきです。しかし、圃場の能力が足りず、その要素を蓄えておけない。また、作物の能力が足りず過剰に要素を吸収してしまい過剰障害を出してしまうこともあります。

このような問題が起きないためにも圃場や作物の能力は高めるべきなのですが、残念ながら、そもそもその能力を高める手段である生体エネルギー準拠位置という視点がまだ一般的ではないのが現状です。

土の能力や、そこで育つ作物の能力は、圃場の生体エネルギー準拠位置の高さにより変わってきます。生体エネルギーという視点そのものがない農業は、圃場の自然の回復力に頼った生体エネルギーの高さでしか栽培がおこなえません。能力の低い土でも蓄えられるレベル、あるいは能力の低い植物でも障害が起きないレベルの要素量しか使えない。

このような農業では、土の能力低下と比例するように作物の能力低下を招き、作物中の成分量を減少させてしまいます。当然その作物を食べて命を保っている私たち人類にもその影響は波及します。満身に栄養素を十分に吸収できない植物を私たちが頂いて、健全な心身想像を維持することが難しいのは明らかです。

しかし、生体エネルギー準拠位置を高めることさえできれば、土の能力が高まり、作物の生育に必要な要素を十分に圃場に入れることができ、圃場の能力によりその要素が十分に機能し、そこで生きる作物は必要な時に必要な量の要素を取り入れることができます。その結果

作物の能力も高まり、それを食べる私たちの能力も高まることとなります。

肥料過多は高血糖値と相似

土壌の話、人の健康と関係つけてみましょう。

以前にも会員の糖尿病の話は何度かご紹介しています。ある方は糖尿病と言われながら、若い頃から薬も飲むことなく普通に生活できていました。血糖値が最高600近かった時には医師には「生きていられるのが不思議」と言われたそうです。通常であれば即入院レベルの状況でも生きていられるのは、それだけの血糖を消費する運動と思考をしていること、そして高血糖を治めるだけの桁違いの生体エネルギー準拠位置を持ちえていたからです。もちろん、土壌に負荷がかかって酸性に傾くように、肉体に大きな不要な負荷がかかっていたのは間違いありません。それでも生体エネルギー準拠位置によって医学の常識、あらゆる常識は変えられるということなのです。そして最近、この血糖値では手術もできないからと食事制限と運動により1ヶ月で300以下にまで下げました。このことにも医師は驚かれたそうです。

土壌に過剰な肥料があっても、肥料やけしない土壌をつくることのできるように、人の体も生体エネルギー準拠位置次第で医学の常識が当てはめられないということなのです。これはすべての存在と現象に当てはめられることであり、生体エネルギー準拠位置を高めることで「必要なものを選択吸収できる能力」を持つということになります。教育でも同様です。WEB上にあらゆる情報が玉石混淆で開示される中、本当に必要な情報を「選択吸収できる能力」は必須と言えます。

長野支部の圃場データ (リン酸吸収係数)

土づくり実施	2017年晩秋		2018年晩秋		2019年晩秋		2020年晩秋	
土づくり方法	表層処理		深層処理		表層処理		表層処理	
分析土壌採取	2017年初秋		2018年初秋		2019年初秋		2020年初秋	
リン酸吸収係数	1226		1139		1424		1250	
上記推移	-87		+285		-174		-104	
有効リン酸	153.0		229.9		162.7		211.8	
上記推移	+76.9		-67.2		+49.1		+644.8	



土壌の深層処理
2019.10.06



ただ今、実を充実中!!



9月には収穫して、ポップコーンを乾燥させます



リン酸吸収係数を下げる

長野支部が毎年行っている圃場実践の事例があります。(1Pの表参照)

一般的には下げることはできないと言われるリン酸吸収係数は、「プログラム農法」を実践していると下げることが出来ます。

どんどん下がっていくリン酸吸収係数ですが、+285と大きく増加している年があります。同じ年には有効リン酸もマイナス67と下がっています。これは生体エネルギーが一時的に下がっている証拠です。

リン酸吸収係数が増加した理由、すなわち生体エネルギー準拠位置が下がった理由は、2018年の土づくりが深層処理という方法で行われたためです。

深層処理というのは、圃場を1m近く深く掘り下げて圃場全体を攪拌し直すものです。普段、専用の資材を入れて生体エネルギーを活用しているのは地表から30cmくらいです。深層処理は、それを越えた深いところまで土を混ぜ合わせる方法です。もちろんこの深層処理に対する対処をしながら土づくりを行っているので、2019年に上がったリン酸吸収係数も、翌年の2020年には下がっています。

深層処理を実施した理由は、土壌環境を整えるためです。土壌は微生物が元気に動くことでその環境を整えます。この微生物のイサとなるのが堆肥などの有機物です。たくさん有機物が元気に動くためには、それだけたくさん有機物が必要です。また、作物を育てるための土壌環境を作り上げるのなら、有機物は土と混ぜた状態であればなりません。たくさん入れたいのに30cmの深さでは量に限りがあります。そこで深層処理です。深さがあれば、その分有機物も増やせます。生体エネルギーの資材も増やせます。良いことづくめの様ですが、これ

数値は、土壌環境が整うまでの一時的な間、生体エネルギーが下がった事例です。一時的に下がっても回復するのは長野支部の圃場が生態系あるいは宇宙として成立しているからです。

生態系や宇宙には想造主がいます。長野支部実践圃場の想造主は、長野支部全員全員の意識の集合体です。そして、その意識の集合体の方向性を決めるのがその組織のリーダーである支部長となります。また長野支部のポップコーンは長野支部実践圃場という大宇宙の中の小宇宙と言えます。そして長野支部実践圃場も自然という大宇宙からみれば小宇宙です。大宇宙の中に小宇宙。この小宇宙が大宇宙としての役割を果たせば次の小宇宙が作れる。こうした繰り返しのうちに私たちは存在しています。

長野支部のポップコーンは小宇宙として成立しています。そうであるからこそ、ポップコーンを食べた私たちに恵を与えてくれるものとなります。ポップコーンの小宇宙としての価値は、長野支部実践圃場の宇宙としての能力と生体エネルギー準拠位置により決まります。これは会社や家庭にも当てはまります。

工場で作られる商品を小宇宙として成立させるためには、工場が宇宙として成立していなければなりません。小宇宙である商品が使用者にとってどれほどの恵を与えてくれる物となるかは、宇宙である工場が小宇宙である商品にどれだけの能力と、どれだけ生体エネルギーを留められるかによります。小宇宙である商品の出来は工場の宇宙としての能力と生体エネルギー準拠位置により決まるのです。

家庭の場合は、家、すなわち「じんち」が宇宙であり生態系です。その中で生活する私たちが小宇宙です。小宇宙である私たちの能力は「じんち」としての家の能力と生体エネルギー準拠位置に大きく影響されます。

話を戻しますが、生体エネルギー準拠位置の高さは、

あらゆるものに影響を及ぼします。その生体エネルギー準拠位置が低下してしまった場合は、それを克服できる量の生体エネルギー準拠位置の加算が必要です。長野支部では、この予期できる生体エネルギー準拠位置の低下に対して、出来る限りの対処をしました。その結果が2020年のいつもより大きく下がったリン酸吸収係数の数値です。深層処理前の2018年に下がった数値はマイナス87、深層処理から一年後の2020年に下がった数値はマイナス174。このようにきちんと数字に答えが出ています。

生態系生体システムプログラム産業

生体エネルギーが発見された当初、生体エネルギーの理論と技術は農業の現場でしか使われていませんでした。しかし、その後たくさんの方の協力を得て、水誘導翻訳装置や電気誘導翻訳装置、命恵しらべなどが開発され、今ではどのような産業でも、どのような場でも生体エネルギーの理論と技術を使うことができます。

「場」の能力を高めて、材料の能力も高めて、使われる力の能力も高めて、こうして生みだされるものの能力を引き出す、あるいは新たな能力を作りだす。これが生態系生体システムプログラム産業です。

圃場には圃場毎のルールが、作物には作物毎のルールがあります。一つの圃場の中に別々のルールをもった作物が共存することもあります。このような状態が問題なく成り立つのは、生体エネルギーの理論として学んできた、虚空界、宇宙、生態系、あるいは宇宙、虚空界、生態系という存在の大前提があり、大宇宙の中に新たな小宇宙が生まれる現象があるからです。圃場と作物は、それぞれ別の宇宙を作っています。圃場という宇宙の中に、

は普通の表層処理よりも大きく土壌環境を変動させます。つまり作物が育つのに適した土の構造を壊す行為にもなるのです。「プログラム農法」が実践されている圃場は、作物を作るために必要な生体エネルギー準拠位置を維持しながら、ひとつの生態系として成り立っているため時間をかければ土の構造も元に戻ります。その土の構造を元に戻すためにはたくさん生体エネルギーが使われます。ですから生体エネルギー準拠位置が高ければ高いほど、土の構造が元に戻る速度もあがります。そこで深層処理での土づくりでは深くなる分に加え、土の構造を早く戻すために必要な、たくさん生体エネルギーを加算します。

生体エネルギーは能力を発揮するために不可欠な力です。そのため土が能力を発揮すればするほど生体エネルギーも使われます。長野支部のリン酸吸収係数が上がったこのケースは、2018年の土づくりのあと、圃場が持っている「環境を整え直す能力」が高いため、どんな元の環境に戻ろうと働き、たくさん生体エネルギーを使ったため起きた現象です。生体エネルギーが大量に使われたことにより、土壌環境は急速に整っていきましたが、その間、生体エネルギーは低い位置で継続し、2019年のリン酸吸収係数は高くなるという結果になりました。

変動する生体エネルギー準拠位置と想造主

生体エネルギー準拠位置は変動する力です。使われれば使われるほど下がります。しかし、生態系あるいは宇宙として成立しているものは、周りの環境による収奪が許容範囲内ならば、生体エネルギー準拠位置を徐々に回復させていきます。

2018年の晩秋に行った深層処理の土づくりの後の圃場から見れば異物である作物という宇宙があります。これは同じ虚空界の中だから成り立つ現象です。生態系としてのルールを持った圃場という小宇宙。その小宇宙の中に別の生態系としてのルールをもった作物の小宇宙ができる。勉強会で良く聞くフレーズも、実際に身近なものに置き換えると使える理論になります。

偏りがあっても栽培できる能力をもつ

「pHが酸性に偏っていても問題なく栽培できる」という事例も、圃場の生態系としてのルールを持った圃場小宇宙と、その圃場小宇宙の中に作物の生態系としてのルールをもった作物小宇宙ができることに起因しています。

要素の多くは陽イオンの形で土壌の中にあります。作物は根から要素である陽イオンを吸収する際に、根から水素イオン(H⁺)を放出します。その結果、土壌中の水素イオン濃度が増加し、酸性化します。プログラム農法を実践していると土壌のpHは強い酸性になりがちです。これはたくさん要素を作物が吸収し、その作物からたくさん水素イオンが放出されているからです。土壌が酸性になるのは植物が健全に育った証拠とも言えます。そして「プログラム農法」を実践していれば、普通では栽培できないといわれるpH濃度(長野支部の最新データは4.8の強酸性です)であっても作物は問題なく育ちます。これを簡単に説明すれば、土壌と作物の能力が高いからです。そしてその原理を説明しているのが先ほどの小宇宙のお話です。

土壌と作物は見た目には同じ場にあっても、別々のルールの小宇宙となります。それぞれのルールの中には生き残る方法が組み込まれています。生体エネルギー準拠位置が高ければ、作物は酸性土壌でも問題なく育つことができます。それなのに生体エネルギー準拠位置が低いと枯

No.280

はじめての一步

リレー投稿 Since 1999

山梨支部の面々とともに



もりさわ よしか
森澤 芳香
(山梨支部・会番号 4654)

れてしまう。それは能力がないからではなく、力不足で自分のルールの中にある生きるための方法が使えないからです。圃場に力があれば、植物は自分の中のルールに気づくことができます。そしてそれを実行することもできます。しかし、作物単独でその力を使うことはできません。作物という宇宙を成り立たせる圃場の宇宙と生態系がなければ、その能力があったとしても、それを発現することはできないからです。そして、今までにない能力を付与することができるのも、圃場と作物がそれぞれ小宇宙として成立して、新たな生き方を生みだせるからです。これはそのまま私たち人間の社会にも同じことが言えます。

ただし注意が必要です。「pHが酸性に偏っていても問題なく栽培できる」ということは、圃場や作物に無理を強いている状態でもあるからです。適正値のpHなら作物は、生き残るための特別な能力を発揮せずとも健全に育つことができます。長野支部の場合、特別な作物を作りたいという人間の都合で、窒素とリン酸を作物に多量に吸わせる状況を作り上げ、その結果pHが酸性に偏ってしまっています。このような中で生きる作物には、その偏り分だけ余分に頑張ってもらっている状態です。

私たちが必要とする能力の高い作物を生産するためには、圃場と作物に通常より多くの困難な仕事をしてもらう必要があります。当然その力を出すために必要な生体エネルギー準拠位置は通常よりも高くなければなりません。生体エネルギーを増やしても、翌年には減ってしまったという話を聞いたことがあります。それは、圃場や作物が、いつもにもまして働いた結果、初年度に予想以上の生体エネルギーが使われたことに気付かず、翌年のために生体エネルギー準拠位置を高めるべきレベルまで上げられなかった結果なのだと考えられます。

はじめまして、山梨支部の森澤芳香です。25年前から心理治療、15年前から運動療法、食事療法を合わせたアプローチ、7年前からミオパシーという筋肉療法(守る仕組みが発動し、硬くロックした筋肉をニートラルの状態に戻す)を取り入れ、自分でできること、自分にしかできないことの重要性をお伝えし、心と体の本来の機能が発揮できる環境づくりのお手伝いをしています。

生体エネルギーとの出会いは、心理治療を始めたころ、友人に誘われ佐藤先生の講演会や常盤館での本部勉強会に参加。すぐに会員登録したものの、佐藤先生のお話がさっぱり分からず、オリベックス愛用、きわみや底力のお陰で元気に育つ庭の植物を楽しんで満足する程度でした。運動療法を取り入れて数年のころ、体に違和感が現れ出しました。それまで様々な下学を学び、その度に佐藤先生のお話に通じていると気付く、この違和感のために生体エネルギーを学ばなければと再登録。十数年かけて学ぶ準備ができたのです。とはいえ、特別セミナーと年数回本部勉強会に参加できる程度でした。幸いにも、芦沢家の皆さんや野沢さんという心強い協力者に教えていただいて、少しずつ環境を整えてきました。

転機が訪れたのは2019年。目

長野支部圃場の土壌分析データ (ホップコーンを栽培)

分類項目	分析年・前年土壌づくり方法	令和3年	令和2年	令和1年	平成30年	平成29年	平成28年
		表層処理	表層処理	深層処理	表層処理	表層処理	表層処理
理化学性	PH (H ₂ O)	4.8	4.6	4.7	4.6	4.4	4.7
	PH (KCL)	5.0	4.7	4.9	3.7	4.3	4.4
	EC (mS/cm)	2.74	2.66	2.06	0.70	1.46	1.04
	腐植含量 (%)	9.6	10.6	10.7	10.8	11.1	10.0
	C EC (meq/100g)	54.5	41.2	36.9	43.2	43.0	38.2
	アンモニア態窒素 (mg/100g)	3.6	5.7	3.5	4.3	10.0	4.6
	硝酸態窒素 (mg/100g)	4.5	16.2	13.8	13.7	18.2	4.9
	有効リン酸 (mg/100g)	856.6	211.8	162.7	229.9	153.0	140.2
	リン酸吸収係数	1146	1250	1424	1139	1226	1379
	置換性石灰 (mg/100g)	1336	749	653	497	583	527
置換性苦土 (mg/100g)	168	82	93	82	81	56	
置換性加里 (mg/100g)	344	209	178	156	188	137	
全炭素 (%)	15.2	7.48	8.16	6.27	6.44	5.80	
全窒素 (%)	2.2	1.28	1.08	1.24	1.28	1.10	
微生物性	細菌	2.7 × 10 ⁶	1.0 × 10 ⁶	3.3 × 10 ⁶	5.8 × 10 ⁶	2.5 × 10 ⁶	7.1 × 10 ⁶
	放線菌	2.9 × 10 ⁶	10 ⁵ 以下	1.0 × 10 ⁶	2.8 × 10 ⁶	2.7 × 10 ⁵	8.2 × 10 ⁵
	糸状菌	1.8 × 10 ⁵	7.4 × 10 ⁴	3.3 × 10 ⁵	1.4 × 10 ⁵	2.9 × 10 ⁵	3.2 × 10 ⁴

は思い描き、少しずつ明確にしてきた夢の実現にやっと一歩踏み出せた今、この機会をいただいたことを、そして、いつも支えてくださっている皆さんに心から感謝しています。

次は山形支部の早坂信義さんにバトンタッチします。



編集部より

本誌は会員のひとりひとりが作り上げていく会報誌として、投稿された方の声を尊重しておりますが、実践や理論の専門的なことは生体エネルギー研究所に監修を依頼しております。内容により一部表現を変更させて頂く場合がございます。ご承知ください。

亀の歩みのような私ですが、30代か

お知らせ コーナー

◎7月の本部勉強会の様子



勉強会後の交流会

実践へのアドバイスや意見交換も行われていますので、皆様の参加をお待ちしております

実践発表者への質問の場
実践発表一日目は新潟支部の捧さん
二日目は長野支部の関さんでした

学問の復習が積極的に行われ「20年前では考ええなかった」と会の進化を感じさせるコメントもありました

今後の日程

その他	支 部										本 部		勉強会・イベント	7月	8月	9月	お問合せ先				
	農業者研究会	研究員研究会	関西支部	東海支部	静岡原支部	新潟支部	長野支部	山梨支部	首都圏支部	東関東千葉支部	栃木県支部	宮城支部						山形支部	青森支部	北海道支部	生命の泉を励起する会
7			12			20									10	6	7	1.2	5.6	2.3	02000(04)14330
02000(04)14330	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248	02000(04)0248

※印の勉強会は参加者に規定がございます。お問い合わせください。最新の情報はお問い合わせ先に確認してください。

編集後記

◎「心に響く」 プログラム農法の野菜

6月の本部勉強会に参加した根岸さんからメッセージを頂きましたので紹介します。「おはようございます。昨日帰りに購入したカブのあまりにも美味しいのに感動しております。わたしも野菜やお米を栽培しており、私のも美味しいのですが、とても生体エネルギーのものにはかないません。あまりにも美味しいので友人にカブを2個届けてみました。こんな美味しいのは初めてだと言われ、美味しいカレーをご馳走になってしまいました。できれば早急に田畑の土壌を改良したいのですが、具体的な方法など、どのようにしたらよいか、お教えてください。会員になりました」

この後すぐに、会員になられて農業基礎講座に参加されます。心が響き合い、求める気持ちが湧き上がってくる。こんな出会いを生む産業を志したいと思うメッセージでした。

編集部長 大野純平

真和 2022年07月号
第28巻_第077号/通巻327号

生体システム実践研究会会報

発行 生体システム実践研究会
幹事長 栗田康弘
編集 大野純平・金田直子
監修 生体エネルギー研究所
印刷 株式会社ジャパンスリープ
題字 山川宗休老大師

「真和」編集部
〒300-0511 長野県東御市滋野甲4-9-13
TEL: 026606(04)14330
FAX: 026606(04)14330
Eメール: senergy@chive.ocn.ne.jp